



「協働」は、得意な力を出し合うからこそ機能する。

人を自然に近づける
川いい会
代表 石山郁慧

vol.5

私は広告ディレクターという本業の傍ら、仕事とは対極的な自然活動をライフワークに



幹事・委員として多忙な中、芥川俱楽部の企画会議や活動になかなか参加できないジレンマがあります。とくに私のような小学生の子どもを持つ母親は時間的な制約があり、したいこと、その全てを達成するのが困難です。そのような中で「亭主とシェアしながら子育て・仕事をする」。これは協働の原点であり、共にライフワークを楽しむことと思っています。共に

■芥川俱楽部の「実践容易魚みち」にて

できること、無理をしないこと、得意な力を活かせること。仲間といろんな意見を出し合い、聞き合い、その集大成を創っていくことこそ「協働」、すなわち芥川俱楽部の存在価値かな、感じています。芥川俱楽部にとっては幽霊会員のような存在ですが、広報活動のキーとなる情報誌の制作とPRのプロとして、今後も「協働」を取り組みたいと思っています。



■子供たちと共に西の湖・船上観察会



■琵琶湖・淀川流域圏連携交流会にて

しています、「人を自然に近づける」をコンセプトに、川が大好きな人々や家族単位のグループと、自然習習会や自然素材の手づくり教室などを企画運営。2000年1月1日の新年会から、賛同者と共に育んできた「川いい会」は、年を重ねる毎に自然発的に多くのメンバーが集ってきてています。芥川俱楽部の立ち上げ当初は、メンバーの助力を借りて「アユちゃんシンボルマーク」や「情報誌の題字ロゴデザイン・構成骨子」を手掛けたり、積極的に活動参加していましたが…。今、私にできることは、この情報誌の編集構成・デザイナーとの打ち合せといった裏方仕事、そして情報誌を配ることぐらいです。現在、琵琶湖・淀川流域圏連携交流会、環境ネットいばらき等様々な

芥川俱楽部インタビュー①

芥川俱楽部 環境教育担当 山崎 文男さん
たかつき環境市民会議水環境保全グループで活動しています。子どもの頃からよく遊んだ「豊かな芥川の再生」という目標に向かって、自分に出来ることがあれば何でもやってみたいと思っています。この頃、川との付き合いは人付き合いと同じだと思うようになりました。土手の上から見ただけは分からないことが、水際を歩いた時にわかります、川の中に入ると、水の冷たさや流れ、水のにおい、水の音、生物の息吹などを五感で感じることが出来ます。皆さんも是非水の中に入つてみてください。新しい発見がありますよ。自然がいっぱいみんなに親しまれる芥川、子ども達が生き物と触れ合う芥川が理想です。「よい子は川で遊びます」を広めたいですね。



芥川俱楽部 通信

あくあぴあだより

「ヤマアカガエルの産卵」

カエルといえば寒い冬を土の中で冬眠し、春に暖かくなってから地上に出てくる生き物、と思っていませんか?意外や意外! 寒い小雪の降る中、浅い水溜りで鳴くカエルがいるのです。その名もヤマアカガエル。赤茶色の4~8cmのスマートなカエルです。高槻市では、2月になると山間の水田やため池でヤマアカガエルの「キャラララ……、キャラララ……」という物悲しい声を聞くことが出来ます。高槻市内にはよく似たニホンアカガエルとタガガエルの記録がありますが、ニホンアカガエルは最近確認されていません。タガガエルは溪流に住み、グーッと鳴くので、声で簡単に区別できます。さて、ヤマアカガエルの雄はまだ寒い冬の夜、浅い池や水溜りに集まり、物悲しい声でメスを呼びます。そして後からやってきた自分よりも明らかに大きなメスに抱きつき、産卵を促します。メスは1.5~2.4mm程度の卵を1000~1900個も産みます。卵は寒天に包まれ、直径15~20cmぐらいの塊になります。孵化したオタマジャクシは落ち葉



や水草、動物の死骸などを食べて大きくなり、6月ぐらいに小さなカエルになって上陸し、地面を跳ねて山に登っていきます。

このようにヤマアカガエルは産卵期には浅い池や水溜りに集まりますが、産卵を終えると山に帰っていくので、春から夏にかけては水辺ではなく、落ち葉や石の間など、少し湿った山の中で見られます。このカエルたち、1000個以上の卵を産みますが、様々な動物のエサになるので大人になるものは決して多くありません。オタマジャクシのころはトンボのヤゴやマツモムシなどの水生昆虫類やイモリなどに、大きくなつてからもアオダイショウなどのヘビ類、サシバやモズなどの鳥類、タヌキやイタチなどの哺乳類に狙われます。特にサシバは両生類や爬虫類、昆虫類を食べる力ですが、暖かい沖縄などの越冬地から、まだ寒い早春に本州に渡ってくるため、ヤマアカガエルを重要なエサとしています。近年、山間の水田やため池が利用されなくなり、ヤマアカガエルの産卵場である浅い水辺がなくなってきたため、ヤマアカガエルだけでなく、サシバも減少していると言われています。



あくた がわ く ら ぶ

芥川俱楽部



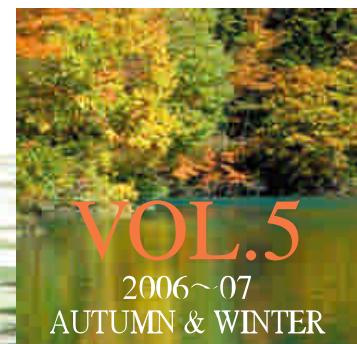
ひとつ魚にやさしい芥川をネットワークする情報誌

S P E C I A L T O P I C S

特集 川づくりサミットin高槻 “めざそう清流”

C O N T E N T S

- 第2回・芥川俱楽部総会が無事終了
- ミズヒマワリ駆除大作戦!
- 芥川「水辺の学校」開催!
- 「ひとつ魚にやさしい川づくり」魚みち部会
- メンバークローズアップvol.5
人を自然に近づける川いい会・石山郁慧
- 芥川俱楽部通信
芥川俱楽部 環境教育担当 山崎 文男
あくあぴあだより



芥川おさかな博物学

鷹羽模様の小ぶりなドジョウ

美しく明瞭な斑紋を纏うシマドジョウ。学名のコビティスは、カマツカ等に似た魚を示すギリシャ語に由来します。ヨーロッパでは雑魚扱いされ、“水のモグラ”とも形容されるドジョウたち。我が国では古くから栄養豊富な魚として知られていて、中でもシマドジョウは元禄10年(1697)に江戸で出版されたグルメ百科「本朝食鑑」で、「頭、背、尾に連なって鷹羽のような漆黒の紋があることから“鷹の羽鱈”と称され、清鮮にして美味」と記されています。鷹羽(タカハ)模様のドジョウとは、実に粋な呼び名で優雅さも感じさせられ、美しい流れを好むシマドジョウに相応しいですね。ちなみにドジョウと言う和名の由来は泥土から生じるもの=土生からの説と、中国名の泥鱈・泥鰌の音字からの2説が知られていますが、はたして真実は。

シマドジョウ
(ドジョウ科・シマドジョウ亜科・シマドジョウ属)
Cobitis biwae



絵と文/nature works 小村一也